「新しい東北」官民連携推進協議会
令和7年度　第三回意見交換会

福島県

1月27日

株式会社JTBコミュニケーションデザイン

● アジェンダ

３．令和７年度における取組振り返り（JCD）

３－１．実践の場実施報告（福島県）

３－２．東北3県･石川県合同セミナー実施報告

３－３．本年度事業実施の振り返り（ご意見）

４．第2期復興･創生期間における取組振り返りおよび

　　第3期復興･創生期間に向けて（JCD/各団体）

５．次年度に向けたテーマの設定･地域課題の洗い出し（JCD/各団体）

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（１）実施概要

■実施概要

〈イベント名〉	福島県「ふるさと愛」プロジェクト2025～未来への架け橋～
〈実施目的〉	全国の大学生を中心に地元の人との交流やフィールドワークを通じて 福島県の魅力を発見し「ふるさと愛」について考える
〈参加者〉	学生18名
〈実施内容〉	10月11日(土) 東日本大震災・原子力災害伝承館／震災遺構浪江町立請戸小学校／ 東京電力廃炉資料館 10月12日(日) フィールドワーク(3コース:各2箇所) 10月13日(月・祝) フィールドワーク(3コース:各1箇所)

● 3－1．実践の場実施報告（福島県）

（2）参加者

〈グループ① 福島県で活躍する女性からふるさと愛について探究〉

		氏名	フリガナ	所属
運営委員会	1	[redacted]		長崎大学
	2			福島大学大学院
参加者	3			東京都市大学
	4			神田外語大学
	5			東北学院大学
	6			宮城学院女子大学

〈グループ② 福島県で自分らしく生きる地元回帰について探究〉

		氏名	フリガナ	所属
運営委員会	1	[redacted]		福島大学
参加者	2			金沢大学
	3			立命館大学
	4			流通経済大学
	5			福島大学

〈グループ③ 福島県への未来に投資 地元での生業について探究〉

		氏名	フリガナ	所属
運営委員会	1	[redacted]		岡山大学
	2			宮城学院女子大学
参加者	3			金沢大学
	4			立教大学
	5			仙台大学
	6			岡山大学

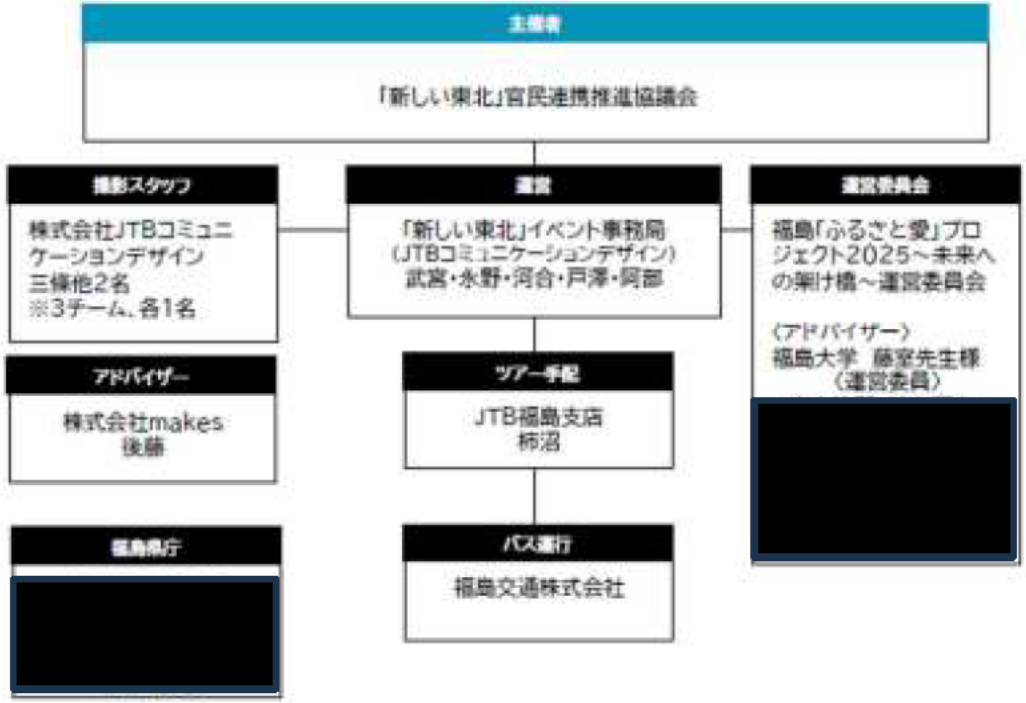
※募集チラシ

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（３）当日スケジュール　1日目（10月11日土曜日）

Time	MASTER	事務局	備考1	備考2
8:30		スタッフ配置 ・福島駅集合 ・JCD 武宮・永野 ・河合・尾澤・阿部 ・後藤・三條 JTB福島支店 池曳 石川 正一 ※バス同乗	藤室先生自車移動	
9:00	9:15 JR福島駅集合			
9:30	移動(105分) ※バス車内 ※座席 チームごとに配置 ・概要説明			
10:00				
10:30				
11:00	11:00~13:30 東日本大震災・原子力災害伝承館見学(150分) (内容) ・展示見学(30分) 休憩(10分) ・語り部講話(40分) 休憩(10分) フィールドワーク(60分)		池曳 による誘導	
11:30				
12:00				
12:30				
13:00				
13:30	13:35~14:25 レストランF(昼食)席自由			
14:00	移動(5分)			
14:30	14:30~15:10 震災遺構請戸小学校(40分)		池曳 による誘導	
15:00	移動(30分)			
15:30	15:40~16:30 東京電力廃炉資料館(50分)		ガイド受付 配布資料数 確認	
16:00	移動(30分)			
16:30	17:00 いこいの村なみえ 到着			
17:00				
17:30	17:30~19:00 フィールドワーク交流会①			
18:00				
18:30	19:00~20:30 いこいの村なみえ(夕食)			
19:00				
19:30				
20:00				
20:30				
21:00				

■実施体制



３－１．実践の場実施報告（福島県）

（３）当日スケジュール　2日目（10月12日日曜日）

3日目（10月13日月曜日）

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（４）実施の様子　1日目 〈共通コース〉

〈共通コース〉

■東日本大震災・原子力災害伝承館

■大平山霊園

■震災遺構・浪江町立請戸小学校

■東京電力廃炉資料館

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（４）実施の様子　2日目／3日目

〈福島県で活躍する女性からふるさと愛について探究〉

2日目

■おおくままちづくり公社（遠藤氏）

■図図倉庫（矢野氏）

3日目

■任意団体「なみとも」（小林氏）

〈福島県で自分らしく生きる地元回帰について探究 〉

2日目

■浅野撚糸株式会社
フタバスーパーゼロミル（岡田氏）

■ふたばプロジェクトまちあるき（小泉氏）

3日目

■カフェ＆ギャラリー秋風舎（志賀氏）

■おかしなお菓子屋さんLiebe（横須賀氏）

〈福島県への未来に投資　地元での生業について探究 〉

2日目

■株式会社H.T.Coast（谷口氏）

■東日本大震災・原子力災害伝承館
（横山氏）

3日目

■株式会社紅梅夢ファーム（鈴木氏）

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（４）実施の様子　フィールドワーク交流会1日目／2日目／3日目

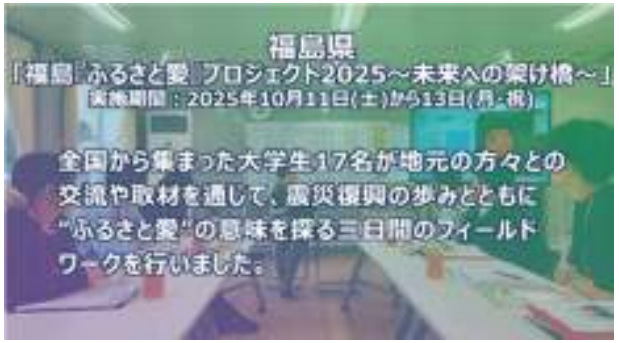
■1日目　フィールドワーク交流会（いこいの村なみえ）

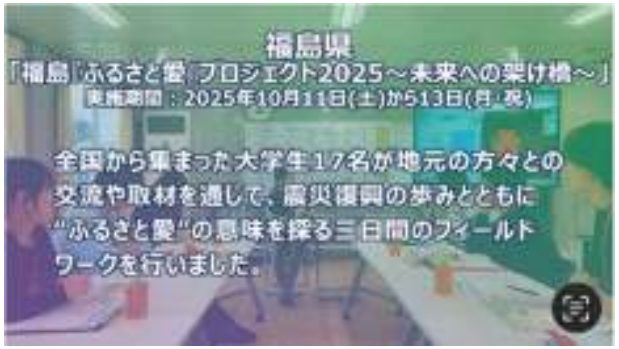
■2日目　Jビレッジ　フィールドワーク交流会

■3日目

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（４）実施の様子　福島県本編





福島本編　　デジタルアーカイブ（53分）

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（５）取りまとめシート記載内容の整理

◆全体のまとめ①【気づき】

- 3チームすべてに共通して、「福島は過去の被災地ではなく、今も挑戦を続ける地域」であるという実感が共有された。
- 各取材先に共通していたのは、“自分らしく生きる姿勢”と“地域を支える誇り”であり、それが新しい福島の魅力を形成している。
- 復興の歩みの中で、働く・暮らす・伝えるという営みが一体となり、地域の持続性を生み出していることを学んだ。
- 若い世代が現地を訪れ、実際に人と対話することで、被災地を“過去”ではなく“現在進行形”として理解する姿勢が生まれた。

◆全体のまとめ②【伝えたいこと】

- 福島は“再生の地”ではなく、“希望と挑戦の地”である。
- 「ふるさと愛」「地元回帰」「地元での生業」という三つのテーマはいずれも、「地域に生きる人々の誇り」を通じてつながっている。
- 自分の言葉で伝え、自分の手で行動する若者の姿が、未来の福島を形づくる。
- 被災地の経験を風化させず、“今の福島”を学び合う実践の場を継続することが重要である。

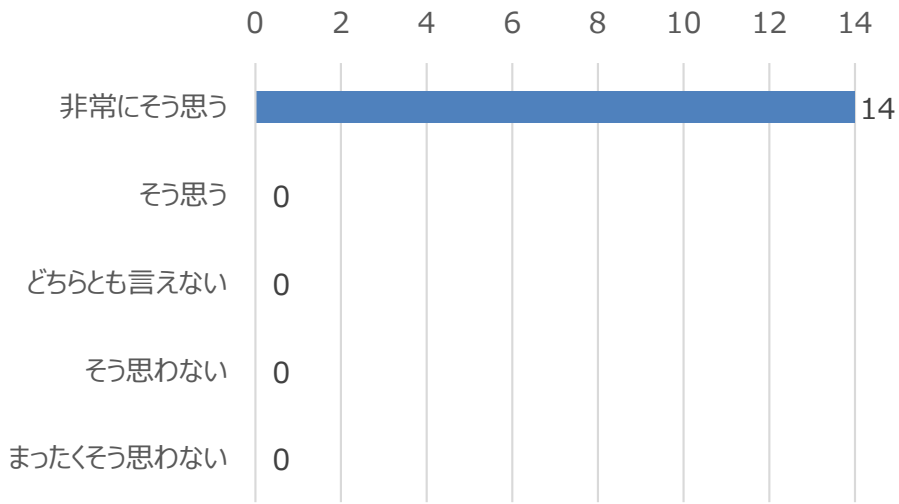
◆所感

- 震災から14年を経て、福島の実践の場は「被災地を学ぶ」から「地域の未来をともに考える」段階へと進化している。
- 今回の3チームの取材は、地域の魅力や課題を多面的にとらえ、「伝える・働く・生きる」を自分ごととして考える貴重な機会となった。
- それぞれのチームが感じた「ふるさとへの誇り」「自分らしい生き方」「地域での仕事づくり」は、いずれも福島の再生と希望の象徴である。
- 現地の声と体験を通じて、参加者一人ひとりが「次の世代に伝える責任」を自覚し始めていることは、極めて大きな成果である。
- 福島の歩みは、単なる復興ではなく、新しい価値観と社会モデルを生み出す「未来への実践」である。
- この実践の場が、今後も多くの若者にとって“学びと行動の出発点”となることを期待したい。

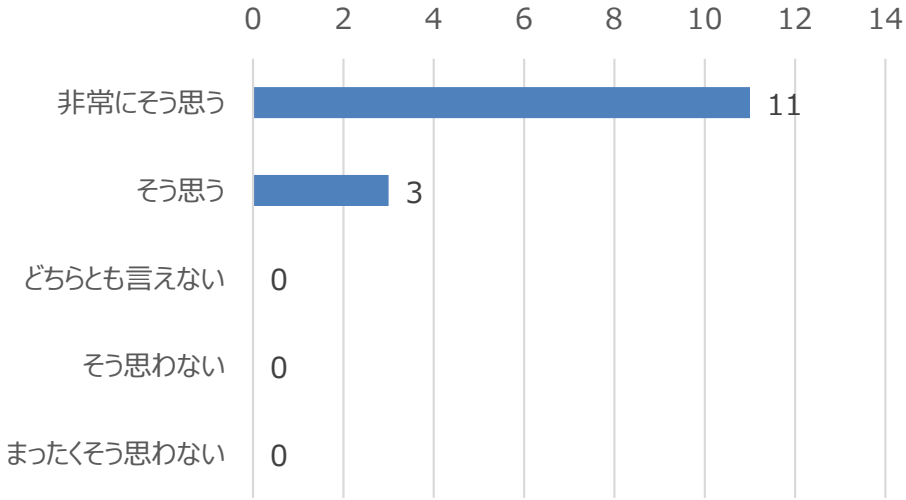
３－１．実践の場実施報告（福島県）

（６）参加者アンケート

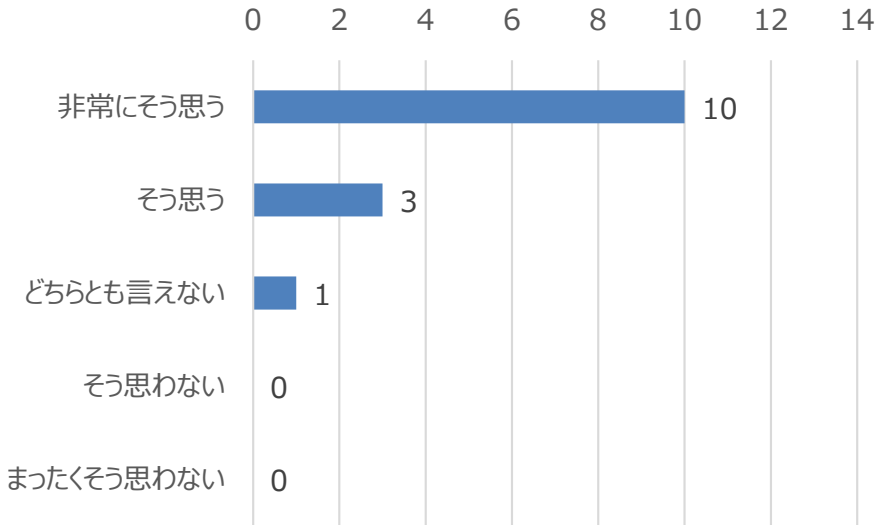
Q. 全体として「実践の場」に参加して良かったと思いますか？（n=14）



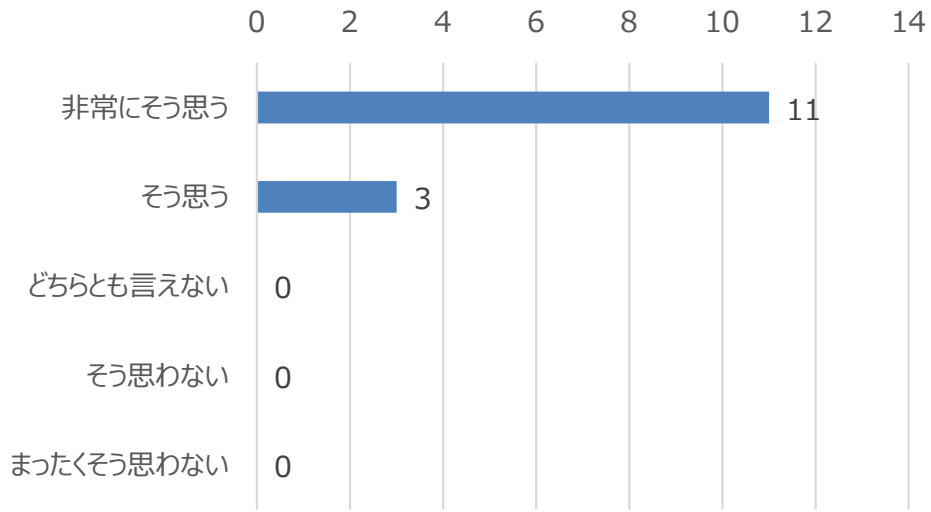
Q. 震災や復興に関する理解が深まりましたか？（n=14）



Q. この経験を他の人におすすめしたいと思いますか？（n=14）



Q. 今後も復興・防災・地域づくりに関心を持ち続けたいと思いますか？（n=14）



（６）参加者アンケート（1/2）

Q. 本事業の「つながりのその先へ」「震災の記憶をつなぐ」意味から、今回の取材を通じて感じた、皆さんと同世代の若者に伝えたいメッセージをご記入ください。

- ①自分自身がこの場に参加したことが、まずこの地域とのつながりになり、参加したそれぞれが何かをやりたいとおもって行動したとき、つながりのその先が生まれるのではないかと思った。だが、やりたい！は義務ではないし、直接復興に関わるものに限らない。まずは重く考えずに地域の参加者になってみること、それによって、自分も伝承者になり得ることを知ることからはじまるのではないか。
  ②しかし、やりたいことをやる！の中にももちろん礼儀は必要。みえない人（自分が見ようとしない人）の話は聞こえてこないし、その地域の中での共通言語（どんな地域か歴史があるか等）はある程度持たないといけない。何もしないでも受け入れてくれるもんだと思うな、ただ受け入れる側もそんなにシャットアウトしてるわけじゃないぞ。お互いが１歩ずつ近づくことで持続可能な未来が作れるのではないでしょうか。

- 復興をもっと身近に感じて欲しいと思います。既存のものを復元するだけでなく、新しいものを創造することも復興の1つです。自分のしたいことや夢を諦めずに追い続ける事が巡って地域創生に繋がるといいなと思います。

- 「復興」は、単に復旧ではなく、「失ったものを取り戻し、それを土台として以前よりもさらに良い、新しい未来を皆で創る」という、非常に力強く、前向きなメッセージを内包した言葉だといえること。

- 自分も東北に少しでも貢献したい。

- 震災の記憶をつなぐということは、過去を思い出すだけでなく、これからの未来をどう生きるかを考えることだと思います。私たちの世代が、その思いを受け取り、行動に変えていくことで、「つながりのその先」を作っていけると感じました。

- 震災でどのような影響があったか、現在はどんな状況なのか、おそらく大勢の若者があまり詳しくないと思います。そのために、まずは知ること、知らなければ何をすべきかなども全くわからないため情報を得ることが僕ら若者に必要なことだと思います。

- 日本中どこで起こるかわからない自然災害に対して、もっと敏感になってほしい。明日は我が身を常に心がけて欲しいし、自分事にできないのであれば、経験者の話をきくのがいちばん。

- 住む人みんながその場所を良い場所にしたいと考えていることは共通しており、訪れる、知ることに意味があると感じました。

- 震災を通して、身近な突然の別れや死について考えるきっかけになるので自分の目で被災地域を見て自分の頭で考えていってほしい。

（６）参加者アンケート（2/2）

Q. 本事業の「つながりのその先へ」「震災の記憶をつなぐ」意味から、今回の取材を通じて感じた、皆さんと同世代の若者に伝えたいメッセージをご記入ください。

- 明るい未来を見据えている方が多いこと。
- 私は東日本大震災を小2の時埼玉で経験しました。直接的な被害はなかったものの子どもながら津波や地震による被害のニュースを見るのが怖くなり、その後も避けたくなるものとして先日まで過ごしてきました。実際に伝承館や"何もない状況"を目の前にしてまだ終わっていない東日本大震災の実態を知る事ができました。実際に震災を体験した方の記憶が、我々のような当時の現場の様子を知らない人に受け継がれていき、次の大きな災害に対する意識を変えられる点で、このようなイベントは非常に意義のある事だと思います。あまり知識がない方がディスカッションをするようなイベントに参加することは勇気のあることかもしれませんが、そんな方こそぜひ参加して欲しいです。
- 1度来て欲しい。教科書や動画では分からないことがある。
- 自分の目で見て感じたことを自分の言葉に置き換えて身近な人たちと話してほしい。
- おそらく今、震災の影響がどのようになったか知らない人が多いと思います。そこで知らないままにするのではなく少しでも知ろうとすることが我々若者に必要なことだと思います。知らなければ何も始まらない、始めるための一歩目を踏み出して欲しいです。

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（７）取材対象者感想

【福島県で活躍する女性からふるさと愛について探求コース】

・こういう取り組みを続けて、福島の魅力を沢山感じてもらって関係人口や一緒に何かをする関係になりたい。
・この取り組みを終えたら、学生がどのような行動を起こすのか、楽しみ。
・チャレンジする場所に関係がないことや、むしろチャレンジし易い環境だということを周知してほしい。

【福島県で自分らしく生きる地元回帰について探究コース】

・自分の活動が学生の今後の指針になると思うと少し緊張するが、少しでもリアルを感じてくれたら嬉しい。
・生活していく上で、どこにいても日々必ず何かは起こるので、自分が納得する場所で生活していってほしいし、それが福島であればうれしい。

【福島県への未来に投資 地元での生業について探究コース】

・学生とか社会人関係なく、地域に訪れるような街にしていきたい。
・今回関わった学生が、どういった気付きを得て、どういう行動をするのかとても興味があります。個別に連絡とってくれる方もいるようなので、期待している。

３－１．実践の場実施報告（福島県）

（８）メディア掲載

■福島中央テレビ WEB版 10月12日掲載

■福島民報10月12日掲載

■福島民友10月12日掲載

■福島中央テレビ　1月21日

福島中央テレビ「ゴジてれChu！」

（７）道の駅ならはとJビレッジの取り組み

■ 実施概要
本取組は、福島県楢葉町の拠点である道の駅ならはにおいて、映像の上映を行い、地域の「ふるさと愛」を発信する。
本企画は、「新しい東北」官民連携推進協議会の取組の一環として実施する

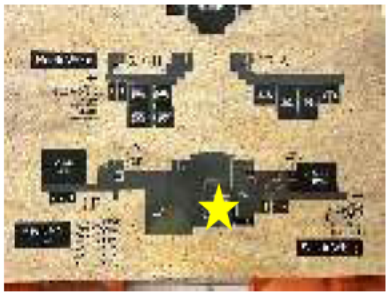
■ 期待される効果
・Jヴィレッジ周辺地域としての歓迎姿勢を可視化し、道の駅の来訪者に発信する
・地域と学生がつくる“ふるさと愛”のメッセージを多くの来場者と共有できる
・道の駅という日常空間を活かして、下記の期間に発信し、12月以降にJヴィレッジにて復興の歩みと未来への希望を発信する

■ スケジュール
11月17日～25日　道の駅ならはでの上映
12月5日～15日　　Jヴィレッジでの上映

本動画は、学生がフィールドワークで取材し、その中で得られた言葉や気づきを基に構成しています。学生が取材やまとめワークショップでの学生が重要だと感じたポイントを抽出し、それに対応する取材者の発言を映像に組み込むことで、来館者のみなさまが地域の想いを自然に受け取れるようにしています。
また、映像と音声をあえて別々に配置し、さらにポイントとなる言葉をテロップで強調することで、取材者の伝えたい内容がよりわかりやすく伝わるよう工夫しています。道の駅ならはでの視聴環境を踏まえ、来館者が立ち止まって無理なく視聴できるよう、
動画の長さは3分に設定しています。

■ 上映場所　道の駅ならは
道の駅ならは館内の展示スペース一角
ディスプレイを設置し、上映。来訪者の回遊動線上にあり、立ち止まりやすい位置

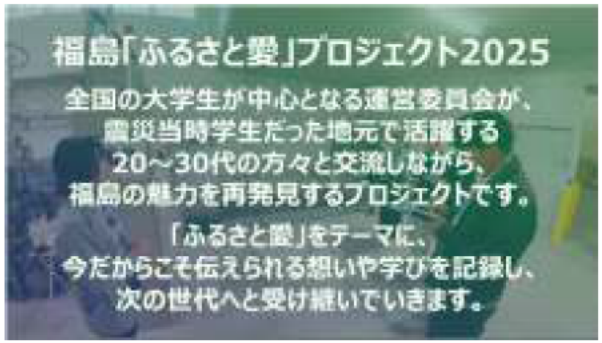
■ 上映場所　Jヴィレッジ
12月5日より上記、道の駅で上映したディスプレイを設置。
館内で上映。



（７）道の駅ならはとJビレッジの取り組み

■上映動画（3分）

ふるさと愛プロジェクト1113



新しい東北

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（１）開催概要

「新しい東北」官民連携推進協議会　東北3県・石川県合同セミナー
震災の教訓を共有し、復興の知恵を次世代へ

●日　時:　2025年12月20日(土)
13:30-16:30(開場 13:00)

●会　場:　石川県地場産業振興センター　本館
セミナー会場:　第1研修室(本館2階)

●概　要:　東日本大震災から15年を迎えるにあたり、東北3県で培った官民連携の知見と、復興の途上にある能登地域の現状や課題を共有し、対話を通じて今後の地域間連携のあり方を共に考える機会として開催。

●主　催:　「新しい東北」官民連携推進協議会、復興庁
（岩手県、岩手大学、岩手銀行、いわて連携復興センター）
（宮城県、東北大学、七十七銀行、みやぎ連携復興センター）
（福島県、福島大学、東邦銀行、ふくしま連携復興センター）

●共　催:　金沢大学 能登里山里海未来創造センター

●連携先:　能登官民連携復興センター

●協　力:　副代表団体、実行委員会に参加した高校生・大学生

●参加者数:一般参加者:32名(事前登録39名)・登壇者・関係者:38名
・オンライン参加者:39名(事前登録35名)計109名

●取材メディア一覧:　テレビ金沢　石川テレビ　北陸放送　北陸朝日放送　北國新聞　金沢日和

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（２）告知チラシ

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（３）プログラム内容

TIME	プログラム内容
13:00	開場・受付開始
13:30	オープニングトーク:
13:40	第1部①:官民連携推進協議会の取組について 石川県＋副代表大学(岩手・宮城・福島)による講演(各10分) 【講演テーマ】 ・金沢大学:(谷内江 昭宏　先生)「能登地域の復興の現状と課題」 ・岩手大学:(五味 壮平　先生)「災後の地域に大学はいかに関わり得るか－陸前高田での実践を通して考える－」 ・東北大学:(姥浦 道生　先生)「官民連携による復興まちづくり事業」 ・福島大学:(藤室 玲治　先生)「学びの地、挑戦の地・福島に集う若者と取り組む復興ーふるさと愛プロジェクトー」
14:25	第1部②:能登×東北 対話の時間 金沢大学・東北3県・自治体・企業等によるトークセッション(30分) 【テーマ】 『新しい東北の取り組みから考える、復興における官民連携の姿』
15:00	休憩(10分)
15:10	第2部:若者たちのメッセージ (1)実践の場(フィールドワーク)映像上映(8分) 発表用8min V3 1 (2)交流セッション(学生同士の対話) (70分) ・現地に行く前のイメージと、行ってから見えた「リアル(ギャップ)」は何でしたか？ ・震災を知らない世代や、同世代に向けて「これだけは伝えたい」メッセージは？ ・「MY ACTION宣言」明日から何を始める？ ・地域に住み続ける／離れる理由 〈クロージングトーク〉(2分)
16:30	終了

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（４）実施の様子

■オープニングトーク
（復興庁　復興知見班　参事官　佐藤　将年氏）

■講 演 ① 金沢大学 理事・副学長　能登里山里海未来創造センター長　谷内江 昭宏 氏

■講 演 ② 岩手大学 人文社会科学部人間文化課程 教授　五味 壮平 氏

■講 演 ③ 東北大学 災害科学国際研究所 教授
姥浦 道生 氏

■講 演 福島大学 センター・研究所等　地域未来デザインセンター 特任准教授　藤室 玲治 氏

■能登×東北　対話の時間

■【第2部】若者たちのメッセージ
（1）実践の場（フィールドワーク）映像上映

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■【第2部】若者たちのメッセージ（2）
交流セッション（学生同士の対話）

■フォトセッション

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（４）実施の様子（動画配信ベース）

※映像：https://www.youtube.com/watch?v=0zDqG7r-NtQ

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

●参加者数：一般参加者：32名（事前登録39名）・登壇者・関係者：38名
・オンライン参加者：39名（事前登録35名）計109名

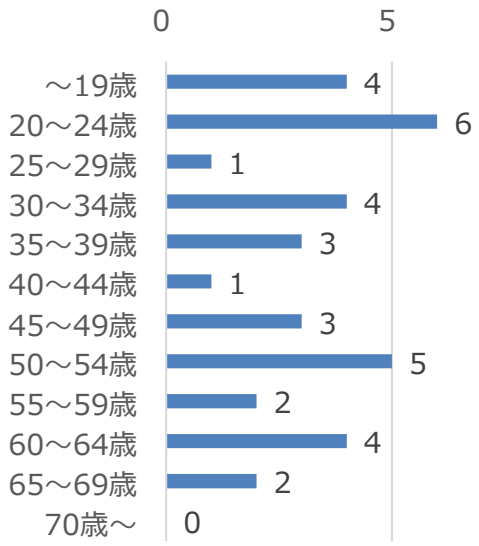
３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）参加者アンケート

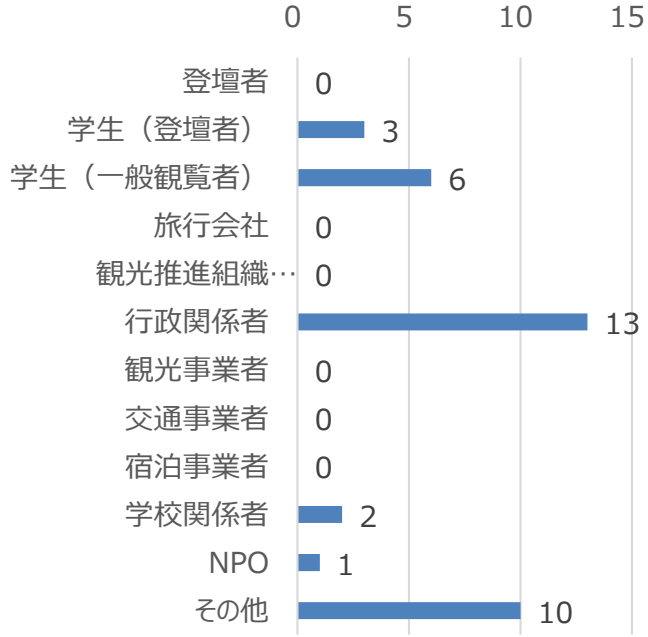
回答者属性：居住地(n=35)

居住地	人数
石川県	13名
岩手県	8名
宮城県	5名
福島県	3名
千葉県	1名
東京都	1名
新潟県	1名
富山県	1名
京都府	1名

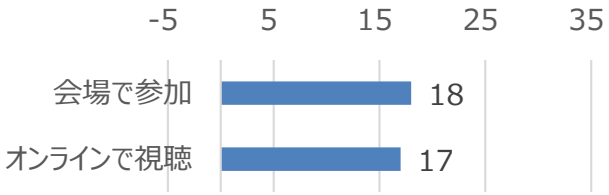
回答者属性：年齢(n=35)



回答者属性：職業(n=35)

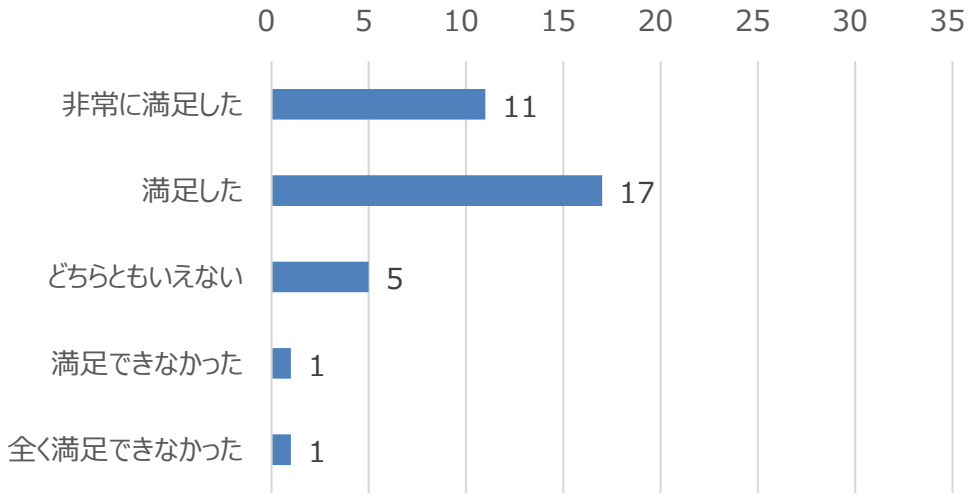


回答者属性：参加形態(n=35)

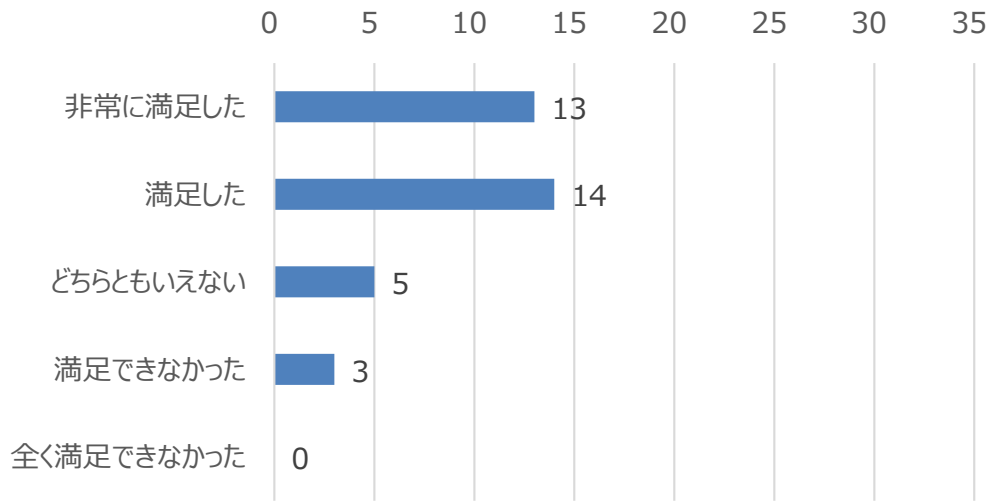


３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

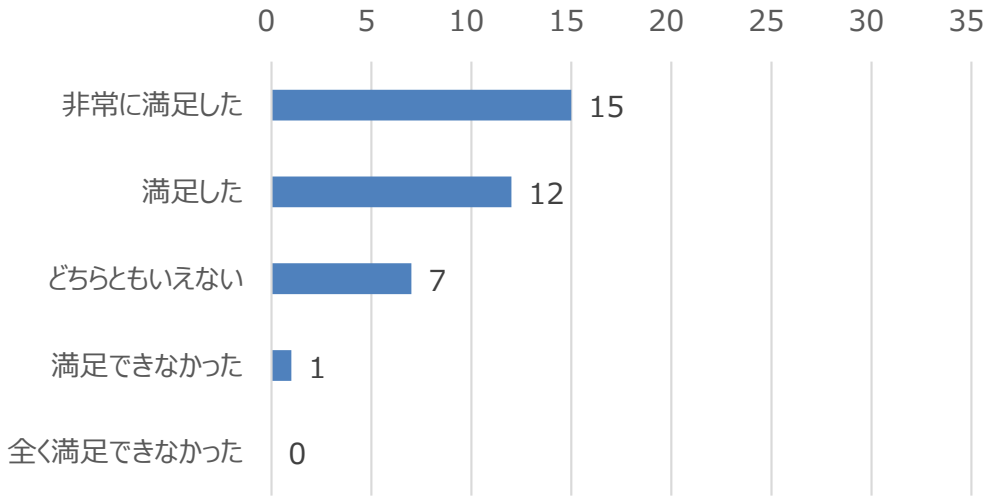
【満足度】 第1部「①官民連携推進協議会の取組について」(n=35)



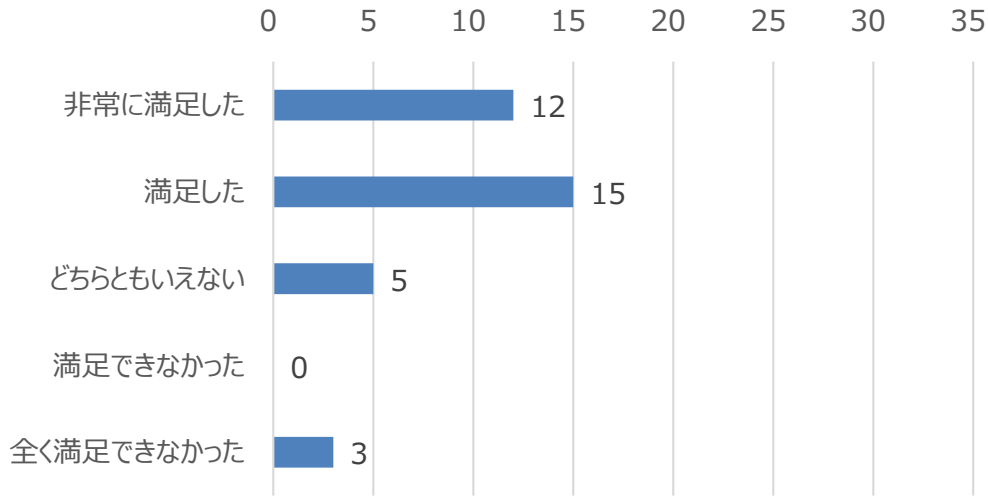
【満足度】 第1部「「②能登×東北 対話の時間」(n=35)



【満足度】 第2部「若者たちのメッセージ」 (n=35)



【満足度】 本セミナー全体の評価(n=35)



３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

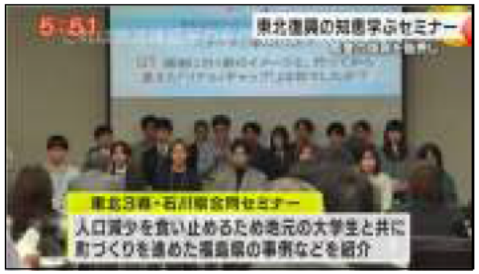
■メディア向け資料
【取材依頼】プレスリリース用

■テレビ金沢　12月21日放映

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

■石川テレビ　12月21日放映



■石川テレビ（WEBニュース）12月21日掲載

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

■北陸朝日放送　12月21日放映

■北陸放送　12月21日放映

３－２．東北３県・石川県合同セミナー実施報告

（６）メディア掲載

■北國新聞　12月21日掲載

■金沢日和WEBサイトへ掲載

● ３－３．本年度事業実施の振り返り

■ 実践の場に関する振り返り

- 福島県では、過年度から継続して参加してくれている学生もおり、本事業が徐々に定着しつつあることを実感できた一年であった。
- 継続参加者がいることで、議論の前提理解が共有され、より踏み込んだテーマ設定や意見交換が可能になったと感じている。

【課題・反省点】

- 取組が定着しつつあるからこそ、年度ごとにテーマや問いを意識的に変化させ、参加者に新たな発見を促す工夫が必要である。
- 継続参加者と新規参加者の間で、前提理解に差が生じないよう、導入部分の設計をより丁寧に行う余地があった。
- 学びや議論が深まる一方で、その成果をどのように整理・発信するかについて、さらなる検討が必要である。

■ 3県合同セミナーの振り返り

- 岩手・宮城・福島に加え、金沢から大学教員を招き、第三者の立場から現状の取組についてコメントをいただけたことは、非常に貴重な機会であった。
- 専門的な視点からの助言により、今後の展開や課題を客観的に整理することができた。
- 学生自身が登壇し、生の声で経験や気づきを語ったことで、事業の成果がより具体的かつ説得力をもって共有された。

【課題・反省点】

- 各県の取組内容が多岐にわたるため、全体構成や時間配分について、より整理した進行とする余地があった。
- 来場者・視聴者の属性に応じた説明レベルや資料構成について、実践の場をより詳細に説明する資料を加えるなど、さらなる工夫の余地があった。
- 学生発表の時間を確保できた一方で、参加者同士の意見交換や質疑の時間を十分に設けられなかった点は反省点である。

4. 第2期復興・創生期間における取組振り返りおよび第3期復興・創生期間に向けて（JCD/各団体）

若者世代の参画を軸に、復興の歩みや地域の魅力を再発見し、次世代へつなぐ取組を継続して実施してきた。学生主体の取材・対話・発信を重視し、大学生によるキャリア発見の取組や、“ふるさと愛”をテーマとした交流・学習型プログラムを段階的に展開してきた。令和4年度以降は、県内外の若者が浜通り地域の事業者や住民と向き合い、視察・対話・共同作業を通じて地域理解を深める実践の場を形成している。令和7年度には、震災復興の歩みと地域への想いを若者自身の言葉で捉え直し、交流と発信を通じて未来へ継承する取組へと発展させている。

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和６年度	令和７年度
テーマ	震災10年の経験と復興実践の共有	若者による地域理解とキャリア形成	次世代による地域づくりの可能性探求	若者と地域住民による交流と発信	若者主体による地域探究と実践	震災復興の歩みと「ふるさと愛」を未来へつなぐ
実践の場	「ふくしまプラクティス2020 ―実践者が語る10年の経験とこれからの挑戦―」福島の復興・創生の現場で活動してきた実践者が登壇し、今後の挑戦について語り合うオンラインシンポジウムを開催し、知見の共有を行った。	「大学生発 福島キャリア新発見 読む会」学生が福島県内企業を取材した記事を題材に、読後レビューと意見交換を実施し、社会人からのフィードバックを通じて、地域企業への理解を深める双方向の交流の場を形成した。	「The Next Generation Summit in J-VILLAGE」 人口減少や担い手不足などの地域課題をテーマに、若者が視察や議論を通じて地域づくりを考える場を設け、次年度以降の取組につながる方向性を検討した。	「“ふるさと愛”プロジェクト in J-VILLAGEあなたに会わせたい『ふくしま』な人～72時間スケッチ旅行～」 県内外の若者が地元住民と対話を重ねながら地域の魅力を描き出し、ポスターセッション形式で発表する交流・発信型プログラムを実施。	「“ふるさと愛”プロジェクト」 大学生が運営委員会を構成し、浜通り地域の事業者との対話やワークショップ、招待状作成、成果発表を含む交流プログラムを実施し、万博関連イベントでも発信を行った。	「『ふるさと愛』プロジェクト 2025 ～未来への架け橋～」県内外の大学生を中心に、浜通り地域で地元で生きる人々への取材・交流を通じて、震災復興の歩みと「ふるさと愛」の意味を探る3日間の実践の場を実施した。
次年度への課題	実践者による経験共有にとどまらず、若い世代の主体的な参画を促し、学びや対話を実践的な取組へと発展させていくこと。	学びや対話を記事の共有にとどめず、現地での体験や交流を含む実践的な取組へと発展させること。	議論段階にとどまらず、若者が主体となって地域と関わる具体的な実践の場を創出すること。	交流成果を一過性に終わらせず、継続的な発信や人材育成につなげる仕組みを検討すること。	学生主体の取組を一過性にせず、復興の知見として整理・蓄積し、次世代へ継承すること。	意見交換会にて議論

● 資料5（福島県）次年度に向けたテーマの設定・地域課題の洗い出しについて

第３期復興･創生期間に入る令和８年度以降、福島県は引き続きの地域課題の解決の場として、「実践の場」を行う。
令和８年度の「実践の場」を行うに当たり、課題の洗い出し及び、どのように進めていくべきかを議論したい。

○　議論のポイント

✓　事務局としては、本年度まで「福島の過去と未来に向けて魅力を発見し、ふるさと愛を考える」をテーマに、福島県沿岸部を中心に魅力発信や事業者連携の創出につながる取組を一貫して行ってきた。
避難指示解除から年数を経ておらず復興途上であることも踏まえ、過去の成果を検証しつつ、取組を継続することを想定。

✓　一方で、地域課題の解決に向けた取組として行っている試行（＝実践の場）の意義や成果等については、効果検証や取り組み自体の情報発信の仕方等に工夫の余地があると考えている。

✓　東日本大震災の被災地の現状等を各方面に理解いただくため、本協議会の各種の取組を、今後の災害復興の際に参考となる情報として、提供することが重要と考えている。

参考　(R7.5)国会における復興大臣の発言（抜粋）

○東日本大震災の記憶ですとか教訓を後世に継承していくということについては、復興しつつある被災地の姿やその魅力を若者を始め多くの人々に体感をしていただくことは、そのとおりであります。
○今後は、首都直下型地震、南海トラフの地域、そうした若者が東北の被災地で交流をするイベントを行う予定にもなっております。

● 資料５－２　（福島県）次年度に向けたテーマの設定・地域課題の洗い出しについて

●福島県庁

【課題】

福島へ関心を持つ人の輪の拡大、地域（・人）の魅力発信（これまでの取組の継続）がある。背景として、東日本大震災から間もなく15年を迎える中で、時間の経過とともに記憶の風化も進んでいる。また、震災や原発事故のことを知らない世代も増えてきている。その中で、多くの人（特に若い世代）に福島に来てもらい、福島を知ってもらう、興味を持ってもらう、感じてもらう取組を継続的に行い、福島に関心を持つ人を増やし、繋ぎとめる必要（先月の石川県におけるセミナーにおいても、学生から「実際に行ってみないと分からない」、「情報発信や関係人口を増やしていくことが重要だと感じた」との話もあったところ。）がある。

【取組案】

学生が福島を訪問し、地域で活躍する方々と交流するこれまでの取組と同様の流れとするのが良いのではないか。企画も運営委員会形式で、今回参加した学生数名がメンバーとなって内容を検討する。毎年継続的に参加している学生も多いことを踏まえ、実践の場の行程の中に、復興の進捗（前年度と変わったところ）を見せる、説明する機会を設ける。実践の場において作成したもの（成果）をどのように発信するか、どのようなものがあれば発信しやすいかも含め、学生・事務局による情報発信の仕方（SNSの活用方法）を学生と検討する。年々参加者（学生）の輪が広がっており、今後も同様の取組を継続していくことで、これまで参加した学生が周囲の学生などを巻き込んでいくことや、若者が精通するSNSを通じた情報発信により、福島へ関心を持つ人の輪が更に広がることが期待され、風化防止にも繋がる。参加者と交流することとなる地域の方々にも光を当て、その方々の取組も紹介することで、地域やそこで活躍する人の魅力発信にも繋がる。

一方、取組の成果の発信については、今後より力を入れるべきポイントと思料。参加者や実践の場に関わった方々のみならず、国・県・市町村、福島県内外の教育機関、関係団体等へ広く発信・展開し続けることが重要であり、復興庁及び副代表団体による「実践の場」の知名度を高めることにも繋がる。

● 資料５－２　（福島県）次年度に向けたテーマの設定・地域課題の洗い出しについて

●東邦銀行
【テーマ】「福島『ふるさと愛』プロジェクト2026～未来への架け橋～」

風評・風化対策は継続的な取り組みが求められているため、継続タイトルとし、将来世代に被災地の実相や復興の実情、新たなビジネスの萌芽を実感してもらう。

【課題】
東日本大震災・原発災害の風評・風化、復興の地としての発信の弱さである。背景として発災から15年を迎えるが、農林水産物を中心に風評は払拭されておらず、震災・原発事故に対する関心の低下が懸念される。国家プロジェクトが複数走っているにもかかわらず、関心が低いのが現状としてある。本県の正確な情報の伝達や将来世代に対しての震災・原発災への注意関心の喚起、復興や本県発のイノベーションに関する前向きなナラティブの形成、伝播を期待する。

【取組案】
浜通りでの学生のフィールドワークやＦ－REIや福島イノベーションコースト構想と連携した学生インターンやアイデアソン。連携先として福島県、各市町村福島イノベーションコースト構想推進機構、Ｆ－REI、地域の事業者を考える。
　期待される成果として、学生に対して震災・原発災及び被災地に関する正しい情報の伝達・理解と復興の地・福島の認知向上、ポジティブなナラティブの形成及び伝播が考えられる。地域に対して、学生からの新たな事業アイディアの吸収、対外発信・認知獲得、関係人口の獲得ががあり、福島県全体として、ナラティブベースの情報発信・認知獲得、関係人口の獲得機会創出がある。

● 資料５－２　（福島県）次年度に向けたテーマの設定・地域課題の洗い出しについて

●福島大学

【テーマ】

第2期復興・創生期間の取り組みを継承しているということを示すために「ふるさと愛プロジェクト」という冠は維持し、各年度で、取り組むべき課題をタイトルに入れるという形が望ましいと思う。あるいは、金沢での講演で取り上げたように「学びの地、挑戦の地」というキーワードを入れることも考えられる。

【課題】

福島復興のために取り組むべき地域課題は、風評被害の払拭、帰還政策・移住定住政策の促進、産業・雇用、医療・福祉、コミュニティ再生や伝統文化の継承、震災の記憶の伝承等、多岐にわたる。第2期復興・創生危機感の実践の場では、そのうち、いくつかの課題を取り上げる形で実施してきた。各年度で受託業者や復興庁の担当者も変わり、これまでの年度に積み上げた成果が、ある年度になると、また0からスタートということが起こりえることが想定される。これを防ぐため、継続的に副代表団体が関与し、また昨年度参加者による実行委員会形式で実施し、副代表団体目線、参加者目線で成果の継承と発展が行われることが望ましいと考える。また、副代表団体の継続的な関与、参加者の関与は、第3期復興・創生期間後に、この取り組みを活かしていくためにも重要になる。

【取組案】

年に1回、2泊3日程度の合宿で、全国の大学生や若者が集まるという従来の形式でも良いと思うが、実行委員会を夏ごろに福島で対面開催するなどの方法も考えられる。

2025年度には、能登半島地震被災地および岩手県、宮城県の取り組みとの交流を行った。このような、他地域に学ぶ、他地域に学びを広めるという取り組みを、今後も続けるということも重要で、福島の抱える地域課題の解決のために、他県の取り組みとの、何らかの交流を行うということも考えられる（例　震災伝承について、先行して取り組まれている岩手県、宮城県の若者の取り組みに学ぶ等）。

● 資料５－２　（福島県）次年度に向けたテーマの設定・地域課題の洗い出しについて

●一社）ふくしま連携復興センター
【テーマ】
「3.11からの新たな災害伝承　ふくしま語り人の育成」

【課題】
移住者が増えている被災地域においては、地域の伝統（祭礼や行事）や、歴史、文化に触れる機会が少ない。そのため、郷土を知ると同時に、3.11の教訓を活かした地域防災を学ぶ場が必要となっている。また、インバウンドによる外国人訪問者も増えており、震災・原発事故を伝える地域資源として語り部の育成も求められている。

【取組案】
被災地域では、震災前から災害に対する様々な言い伝えがあり、これにより津波避難を逃れた住民もいる。沿岸部では、言い伝えに従い、高台の神社に避難し難を逃れた住民も多く注目されているところもある。そこで、住民の精神的な安らぎや地域の絆として地域コミュニティの重要な役割を果たしてきた地元神社（外部支援から再建された所も含め）フィールドワークとして視察し、そのストーリーも反映したうえで、新たな地域防災の言い伝えやことわざを創りだす。参加者を、伝承される側から「福島を語る人」として、新たな震災の「言い伝え」の作者として、次世代や他地域での震災伝承人として育成する。